

### ドラマセラピーの手法（3）

## 「シアター・フォーラム」

～アウグスト・ボアールの「被抑圧者の演劇」から

尾上 明代

手法の紹介3回目の今号では、「シアター・フォーラム（討論劇）」を取り上げる。「ドラマセラピーの手法」とは言うものの、もとはブラジルの演出家・政治活動家であったアウグスト・ボアール(1931-2009)が実践した「被抑圧者の演劇（Theatre of the Oppressed）」の中の一手法であり、実はセラピーを意図して開発されたものではない。しかしドラマセラピーの枠組で使うと有効であることから、これをセッションに組み入れるドラマセラピストは多い。ボアールは、「演劇は、被抑圧者を解放する『武器』である。演劇をとおして被抑圧者たちは、自己を表現し、この新しい『言語』を使いながら、表現すべき新しい内容をも発見するにいたる。」と述べているが、このコンセプトはドラマセラピーと同じものだ。「被抑圧者」を「クライアント」に置き換えると理解できるだろう。

#### シアター・フォーラムとボアール

ボアールのワークショップでは、身体を

使ったゲームや表現力を高める活動などのプロセスのあと、「シアター・フォーラム」をおこなう手順になっているが、本稿では前段階の活動については割愛し、まず「シアター・フォーラム」そのものの実施法を、簡潔に説明したい。最初に、解決策がわからない社会的・また政治的な問題が含まれている話題を参加者から募り、ドラマ化して上演する。問題の状況を皆で共有したあと、再び同じ劇が演じられるが、今度は「自分ならこう言う」「こうしてみたら」「こう変えたい」というような選択肢を思いついた観客たちが、途中で劇の進行を止め、演者を交代して演じる。この方法で時間の許す限り、さまざまなアイデアを出し合っ、実際に試していくのである。

当然、ある人の一つのせりふ、一つのアクションが変われば、他の人の反応や行動が変わる。それにより劇の筋が代わり、登場人物の人間関係も変わり、それに続く結果も変わる。そのことを、参加者が「演劇的に討論する」こと、すなわち自らの身体・感情・声などを使って体感することで、そこから現実を変える可能性や力が生まれる

のである。

ボアールは、「劇場は私たちの美德と欠陥を等しく照らし返す鏡のようだ」というシェークスピアのハムレットのこぼれを気に入っていたが、彼自身は、むしろ劇場を、現実を変化させることにつながる鏡だと捉えていたのだ。

そもそもボアールが、このような手法を編み出し実践した目的は、「客体」である民衆を「主体」へと変容させることだった。つまり受動的な存在である民衆を、「劇的アクションの中で行為しうる行為者＝俳優」へと変容させ、社会を変革するためだったのである。1964年、ブラジルでクーデターが起きた後、彼の活動は軍の独裁政権から脅威と見なされた。彼は1971年に路上で誘拐・逮捕されて、4ヶ月の間、投獄・拷問を受けた。釈放後、アルゼンチン・ペルー、ポルトガル・パリでの15年に及ぶ亡命生活を経て、1986年に、ようやくブラジルへの帰国を果たすこととなる。1992年には、リオデジャネイロの市議員となり、シアター・フォーラム手法を使って、福祉や医療システムの問題、偏見や差別、女性に対する抑圧などの問題をコミュニティで議論し、その活動から新しい法律の制定に至ったものもある。

## 事例

ボアールは、「被抑圧者の教育学」を著したパウロ・フレイレから大きな影響を受けた。フレイレの晩年に活動をともしていた時期もある。フレイレが重視した「対話」や「意識化」を、ボアールは演劇を使

って可能にしようとした、とも言えるだろう。以下に当時のブラジルでの「被抑圧者の演劇」活動の中からの事例を紹介する。

### <事例1>

夫に裏切られた（字が読めないために、夫の愛人からのラブレターを大切な書類だと思い込まされていた）ことを知ったある女性から、どのようにすれば恨みを果たせるかという問いかけがあり、女性の観客たちがいろいろな提案を出して、すべてのアイデアを演じ、その効力を試した。夫が気がとがめるくらいにさめざめと泣く・家出する・帰宅した夫を家の中に入れない、などの場面が演じられた。しかし、泣いても効果はなく、家出しても結局困るのは妻自身であることが実感をともなって理解され、また夫を閉め出した場合も、彼は給料袋をもったまま愛人のところへ行ってしまおうという結果になった。最後に、夫をなぐってから普通にごはんの支度をする、という「解決策」が提案され、観客の女性たちから大喝采が起きた。

### <事例2>

魚粉工場の労働者たちが、長時間労働を強いられ搾取されていることに対してどのように戦うべきか、という問題が提起された。解決策として、工場の監督が見ていないときにノロノロと働く・工場の機械をわざと壊して修理中の時間に休む・工場を爆破する・ストライキをする、などのアイデアが提案されて演じられた。しかし、頭で考え出したアイデアを実際に演じてみると、好ましくない具体的結果に繋がることがわかった。工場を爆破すれば職場がな

くなってしまう、ストライキをしたらクビにされる（すぐに経営者の役の演者がストライキをしない新しい労働者たちを雇い始めた）などという筋書きが現れたのである。そこで、きちんと労働組合を作るということで参加者の意見が一致した。もちろん、労働組合設立の結論がベストだと言っているわけではない。シアター・フォーラムは、あらゆる意見や解答を「演劇的な実践を通して検証する可能性」を民衆に提供するものであり、「いかなる結論も強制しない」とボアールは説明している。

#### ボアールの意図と「セラピー」の関係

ボアールは、この手法は「革命のリハーサルになる」と言い、シアター・フォーラムの目的は「社会の変革だ。個人の治癒ではない」と明言している。さらに「舞台上『革命』が遂行されてしまうと、観客はそれで満足してしまう。革命は現実の中で起こさなければならない。」とも述べている。彼の意図としては、つまり、その場でカタルシスが起きて、気持ちが収まってしまう「癒し」の場を作ってはいけけないのである。

社会教育的・社会変革的なモデルと、心理療法的・治療的モデルの違いは、参加者あるいはクライアントのどこを見据えながらすすめるプロセスなのか、という点である。しかし、社会の現実や集団的心理であれ、個人の現実や心理であれ、「今、それ」を変えようとする方向は共通している。ドラマセラピーでは、いろいろなオルタナティブを演技・行動で試し、現実の難しい状況や症状を変える力を得るために、この手

法を使う。つまり、劇場の外（現実）で「革命」を起こそうとしている点では同じだ。さらに言えば、個人を癒す・社会を治療する、という両方が必要と提唱し、サイコドラマ・ソシオドラマを生み出したモレノの主張を思い起こすと（対人援助マガジン第10号、ドラマセラピーの手法（1）—「社会を癒す」ソシオドラマを参照）、根本的なところで通底していることが理解できる。

私自身、一般参加のワークショップでも、治療的なセッションでも、この手法をその時々に合わせて有効に使っている。例えば、小さいいじめやハラスメントが起き始めたいくつかの具体的な場面で、誰がどのような言動をすると大きいいじめに発展していくのか、またどうすればそれを防げるのか、多くの可能性を実際に演じて試すことで、参加者たちに、そのプロセスや構造を理解してもらおう。臨床事例としては、アルコールや薬物依存症のクライアントたちが、アディクション欲求がおきる（飲みたくなる・薬を使いたくなる）ときの対策を立てるときなどにもこの手法を使っている。また、最近の事例で印象に残っているのは、強い不安障害のためにスーパーのレジでの支払いが難しいというクライアントたちとのセッションである。支払いの際、どのようにしたら良いかというアイデアとして、「おつりをもらう時間を省いて支払いを早く終わらせるために、事前に小銭をたくさん用意しておく」、「レジ係に天気など気軽な話題を話しかける」、「緊張で手が震えていることをレジ係に伝える」等々が演じられた。中には、震える手でレジ係の手を握り、レジ係役も（買い物客に共感を示すた

め) 震える手で握り返す、という場面もあった。このようなことは、現実には起こり難いものの、不安感情の表現を実際に試して仲間たちと共有できたという点では、非常に意味のあるワークになった。ここでは、それまで何回も同じメンバーで積み上げたプロセスのおかげもあって、良質なユーモアあふれる笑いとともに皆でアイデアを演じ合うことができた。

## 終わりに

ドラマセラピストの Nisha Sajnani は、多くの社会問題をかかえる現代におけるボアール手法の意義について、次のように述べている。

ボアールの方法は、集団的トラウマとその影響が、個人およびグループの心理に及んでくる過程、そして、それを解除する取り組みを行なう際に、ますます必要となる道筋を与えている。個人的な物語を集団のものにしていくことを通して、「被抑圧者の演劇」は、苦しみを引き起こす文化的な環境条件を見つけ出し、それに取り組むためのいくつかの手段を提供する。そうすることで、精神病理を、個人の弱さや欠陥から形成されるという支配的で公式的な見解から引き離したのだ。

「被抑圧者の演劇」には、他にも「見えない演劇」「新聞劇」などいくつかある。またヨーロッパに亡命中、そこでの必要性に応じてセラピー的な要素が強い手法（「欲

望の虹」など）も開発されたが、今号では「シアター・フォーラム」に絞って紹介した。

逮捕・拷問・亡命などの苦難を乗り越えたボアールの活動は、世界中のさまざまな分野の多くの人々に影響とインスピレーションを与えた。「被抑圧者の演劇」センターは、現在パリ、リオデジャネイロ、そしてアメリカ、カナダなどの各地にある。ボアールは、2008年にノーベル平和賞の候補にノミネートされたが、翌年の2009年、白血病により他界した。日本に一度だけでも招きたいと仲間たちとともに考えていたが、結局それが叶わなかったことが大変残念である。

文献：

ボアール, A. 「被抑圧者の演劇」里見実ほか訳 晶文社 1984年

Sajnani, N. (2009). Theatre of the oppressed: Drama Therapy as Cultural Dialogue.

In Johnson, D.R. & Emunah, R. (Eds.), Current Approaches in Drama Therapy. C.C.Thomas.